

大学生の男女間における楽観性とリスク傾向の差について

1190575 脇田 恵介

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

最近の日本社会は仕事やプライベートにおいても時間に追われており、余裕がないとしばしば言われている。しかし、その中でも大学生の4年間は自分の思い通りに使うことの出来る例外的時間と考えられ、時間に余裕を持った生活を送ることが出来、大学生の思考も比較的楽観的になると言われている。実際、沢宮(2000)によると大学生は社会人に比して楽観的であると示されている。そこで大学生は楽観的であるという立場の元、今まで存在しなかった男女間での楽観性を比較した研究を行うこととした。また、楽観的な学生はギャンブル等のリスクを伴う行為を好むのではないかと考え、男女間でのリスク傾向の差についても調査を行うこととした。研究方法として、395人の個人の対象者にアンケートを実施し、データ要約とヒストグラムの作成および Mann-Whitney test を適用し分析を行った。その結果「大学生の男女間における楽観性」においては有意な差は見出されず、「大学生の男女間におけるリスク態度」においては男性の方がリスクをとる傾向があることが示された。楽観性とリスク傾向の間に相関はないことも同時に明らかになった。

2. 背景

近年、無気力な大学生の姿が問題となっている。確かに筆者の周囲の友人を見ても飲み会やサークル活動、ギャンブルといった勉強以外の活動に多くの時間や金銭を費やし、自分の将来や大学での学習を非常に楽観的に考えている印象を強く受ける。また、日常生活においてギャンブル等のリスクを伴う行動を好む人間は楽観的であると感じる場面が多々あり、その傾向は男性が女性に比して顕著ではないのかと考えた。実際、Charness(2012)らにより男性は女性に比してリスクを好むことが明らかになっている。しかし、前述の研究は文化の違う海外において実施されたものであり、日本人を対象にした研究は現在まで存在しない。さらに大学生を対象にした研究についても現在までに確認できない。そのため筆者は日本人を中心とした大学生の楽観

性およびリスク傾向を測定し、それらは女性に比して男性が高く、なおかつ両者の間には相関があると仮定し、研究を進めることとした。

3. 目的

本研究では、アンケートを用いて大学生の「リスク傾向」と「楽観性」を測定し、両者の男女差および相関があるのかを分析し、検証していく。

4. 研究方法

高知工科大学の香美キャンパスおよび永国寺キャンパスの395人(男性267人、女性128人)にアンケート調査を実施した。リスク傾向のアンケートについてはNicholson(2005)ら、楽観主義尺度についてのアンケートはScheier(1985)らを日本語訳した上で使用した。

リスク傾向についての設問は6つ用意されている。回答は5段階で評価してもらう形となっており、この合計点数によってどれだけリスクを好むのか評価した。ここでは、合計点数が高いほどよりリスクを好むと判断する。

楽観主義尺度についての設問は全てで10問であり、こちらについても5段階評価で回答してもらう形式となっているが、そのまま点数化する項目と点数を逆転させる項目、フィラー項目の3つに分かれている。ここではフィラー項目以外の点数を合計し、19~24点の場合はHigh Optimism、14~18点の場合はModerate Optimism、0~13点の場合はLow Optimismと評価した。その後データ要約、及び、箱ひげ図の作成を行いデータを解析する。更に、Mann-Whitney test を適用し大学生の男女間での楽観性の差およびリスク傾向の差を分析し、さらに両者の間に相関が見られるのかを分析した。

4-1. 設問 リスク傾向について

リスク傾向についての具体的な設問をいくつか以下に示す。

「あなたは喫煙、不健康な食事や多めの飲酒などをどのくらい行い

ますか」や「あなたはギャンブルやリスクのある投資など行ったことはありますか」など比較的大学生に身近であると考えられる設問と「あなたは再就職先が決まっていないう退職をした、というようなことを行ったことがありますか」など大学生にとって経験が乏しいのではないかと考えられる設問で構成されている。設問の回答については、『1. 全くない』『2. ごくたまにある』『3. たまにある』『4. よくある』『5. 非常によくある』の5段階で評価してもらう形式となっている。

4-2. 設問 楽観性について

ここでいう楽観性の定義は「人間が将来へのポジティブな結果を予測する傾向」のことである。楽観性についての質問項目を以下にいくつか示す。点数を逆転させない設問として「常に自分の将来について、楽観的だ」や「全体的に、悪いことよりいいことが起こると期待している」などの3問で構成されている。この項目に関しては直接楽観性を問うような設問であり、回答者にとって比較的イメージしやすい内容となっているのではないかと考える。次に点数を逆転させる項目の設問の例を示す。

「物事が思い通りにいくことは、ほとんど期待していない」や「幸運にはほとんど期待していない」などの3つの設問が準備されている。この項目に関しては否定的なニュアンスを含む設問となっているため、点数を逆転させて扱う。そのほか、フィラー項目として「リラックスしやすい方だ」や「そんな容易には怒らない」など4つの設問が含まれている。こちらの項目は、『0. 全く同意できない』『1. 同意できない』『2. どちらともいえない』『3. 同意できる』『4. とても同意できる』の5段階で評価してもらった。

4-3. アンケート結果を用いての分析方法

アンケート結果を用いて、まずはデータ要約を行い、平均、中央値、標準偏差の算出および箱ひげ図の作成を行った。また、リスク傾向と楽観性の間の相関を考察するため散布図の作成も行った。加えてMann-Whitney testを用いた検証も実施した。これらすべての分析にはStataを利用した。

5. 結果

5-1. データ要約、及び、箱ひげ図

研究方法の項目でも述べた通り、リスク傾向についての設問は6つ

で構成されており、5段階で評価をしてもらう。そのため、リスク傾向において取りうる値の最大値は30、最小値は5となっている。ただ、実際の回答においての最大値は20、最小値は6となった。この結果を基に男女別でデータ要約を実施したところ、平均値は男性で10.45、女性では9.49となった。また、中央値は男性で10.00、女性においては9.50となり、標準偏差は男性で2.65、女性で2.27となった。(図1) また、今回の結果を用いて箱ひげ図の作成を行ったところ、以下の図のようになり、男女間でのリスク傾向に差があることが見て取れる。(図3)

次に楽観性の設問は10問で構成されている。前述したようにそのうちの3問は回答をそのまま点数化し、3問は反転して点数化、4問はフィラー項目である。こちらについても男女別にデータ要約を実施したところ、男性の平均点数は11.94、女性の平均点数は12.10となった。中央値については男女ともに12.00となり、標準偏差は男性では3.65、女性は3.91となった。(図2) 楽観性の男女間での差については以下の図よりほとんど存在しないということが見て取れる。(図4)

Risk	平均	中央値	標準偏差	最大値	最小値
男性	10.45	10.00	2.65	20	6
女性	9.45	9.50	2.27	16	6

図1 リスク傾向のデータ要約

Optimism	男性	女性
平均	11.94	12.10
中央値	12.00	12.00
標準偏差	3.65	3.91

図2 楽観性のデータ要約

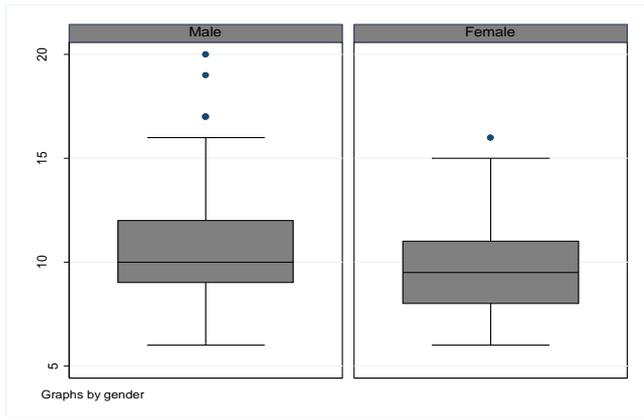


図3 リスク傾向の箱ひげ図

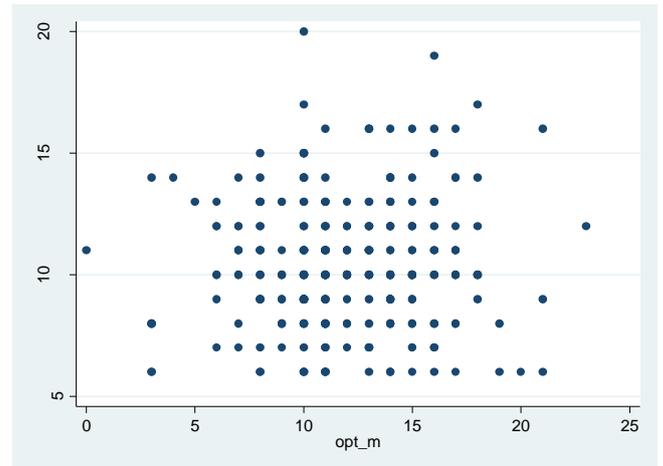


図6 男性のリスク傾向と楽観性の散布図

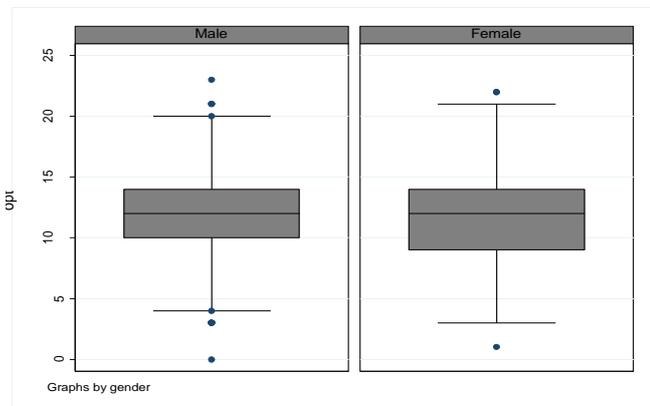


図4 楽観性の箱ひげ図

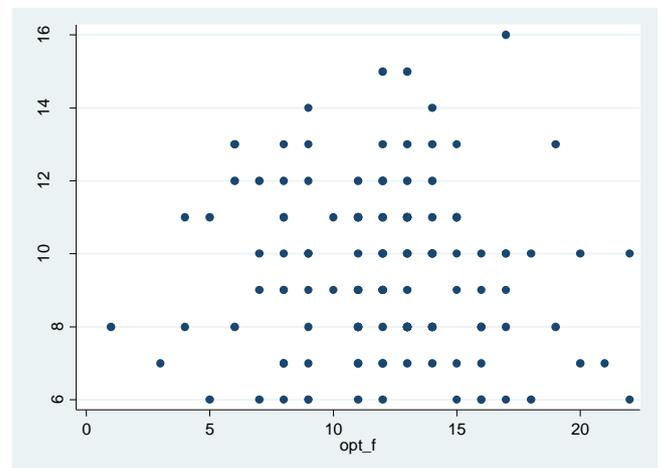


図7 女性のリスク傾向と楽観性の散布図

5-2. リスク傾向と楽観性の相関

リスク傾向と楽観性については相関があると仮定したため、検証を行った。その結果、全体(395人)での相関係数は -0.0031 となった。次に男女別での相関係数を算出したところ、男性では 0.0303 、女性では -0.0667 となった。以上の結果より、リスク傾向と楽観性の間に相関はないと判断することが出来る。

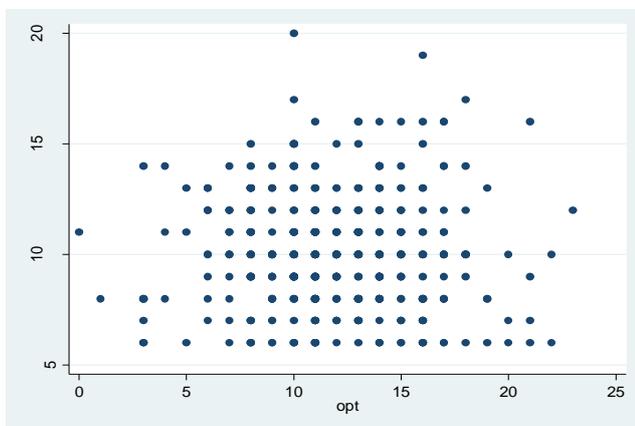


図5 全体でのリスク傾向と楽観性の散布図

5-3. Mann-Whitney test を用いた検証

今回のアンケートで得られた結果を用い、Mann-Whitney test で検証を行った。まずはリスク傾向のデータを用いて Mann-Whitney test を実施した。結果は $P > 0.0008$ となり、帰無仮説を棄却出来る。そのことから大学生の男女間におけるリスク傾向の差は統計的に有意であることが検証された。次に楽観性のデータを用いて Mann-Whitney test を実施した。こちらは $P > 0.6761$ となり、帰無仮説を棄却できないため統計的に有意な結果は得られなかった。

6. 考察

本研究は当初「大学生において男性は女性に比して楽観的であり、リスクを好む」という仮説を立てて行っていた。しかし、分析の結果

「大学生において男性が女性に比してリスクを好む」という仮説については証明されたが、「大学生において男性が女性に比して楽観的である」という仮説は棄却された。また、リスク傾向と楽観性の間には相関が見られなかった。

男性が女性に比してリスクを好むという結果が出た点に関しては過去の研究通りであり、大学生においても同様の結果を示したことは筆者にとって予想通りであった。ただ、理論上取りうる最大値が30の中でリスク傾向は男性の平均が10.45、中央値が10.00、女性の平均が9.45、中央値が9.50となり10程度の値が平均および中央値となった。この点数は筆者の想像よりも低い点数であった。この結果には様々な原因があると考えられるが、設問の中に通常の大学生生活を送る過程ではなかなか経験しないような項目が含まれており、この点は少なからずアンケートの回答に影響を与えたのではないかと考えられる。

また、男性が女性に比してリスクを取ることは統計的に有意であるという結果が得られたが、男女間での差がそれほど大きくはなく、男女ともにある程度の慎重さは持ち合わせているのではないかと推察することが出来る。加えて、大学生の男性と女性の間で楽観性に有意な差が見られなかったことは意外であった。

なお、今回のアンケートは対象者を高知工科大学の学生に限ったものであるが、都市部の大学などで同様の調査を実施すれば違った結果が得られるのではないかと考える。また、同じ高知工科大学の学生にアンケート調査を実施する場合でも時代によって結果が異なる可能性もあると考えられる。というのも、楽観性やリスク傾向は家庭や周辺環境、その時代の社会情勢などに左右される可能性も捨てきれないからである。今回の研究においては加味しなかったが、人物の背景や時代背景に目を向けることでより詳細に大学生のリスク傾向や楽観性、行動様式を検討できる余地があるのではないかと考える。

7. 課題

本研究の課題として、今回実施したアンケートの課題点を指摘する。まず、リスク態度のアンケートの課題点を挙げる。このアンケートは当初現在と過去1年ほどでどうであったかを問うものであったが、大学生の過去1年間では大きな差は見られなかった。また、前述したように質問項目の中に「あなたは再就職先が決まっていなくても退職をし

た、というようなことを行ったことがありますか」や「あなたは何かの選挙に立候補したり、公にルールや決定事項に対して異議を申し立てたことがありますか」など通常の大学生に対する設問として少々答えづらい、あるいは経験が乏しいと考えられるものがあった。ただ、この点に関しては今回使用した翻訳前のアンケートに基づくものであり、設問を変更することは尺度に影響を与える可能性があると考えあえて変更は行わなかった。同じ尺度を用いて大学生対象の調査を今後行う場合は設問内容の変更を検討する必要があるかもしれない。

楽観性のアンケートの課題点は、改訂版楽観性尺度を用いず、古いタイプの楽観性尺度をそのまま翻訳して使用してしまった点である。また、翻訳の精度に関してももう少し高めることが出来たのではないかと考える。例として「不確実な状況では、よく最善を期待する」という設問があるが、このような文章では具体的なイメージを掴みにくく、意味の分からないまま回答した可能性がある。全ての対象者が趣旨を理解し、より正確な結果が得られるようなアンケートに出来るよう考慮する必要があったと考えられる。

8. 参考文献

- Scheier, M., and Carver C. (1985) Optimism, coping, and health: Assessment and implications of generalized outcome expectancies. *Health Psychology* 4: 219-247
- Scheier, M., Carver C., and Bridge, M. (1994) Distinguishing optimism from neuroticism (and trait anxiety, self-mastery, and self-esteem): A re-evaluation of the Life Orientation Test. *Journal of personality and social psychology* 67: 1063-1078
- Nicholson, N., Soane, E., Fenton-O' Creevy, M., and Willman, P. (2005) Personality and domain-specific risk taking. *Journal of Risk Research* 8: 157-176
- 沢宮 容子(2000) 社会人と大学生における楽観的帰属様式の検討
- Charness, G., Gneezy, U. (2012) Strong evidence for gender differences in risk taking. *Journal of Economic Behavior and*

Organization 83(1), pp. 50-58